

宮沢賢治の〈郊外〉—まなざしのせめぎ合う場所—

文学部日本語日本文化学科講師 森本 智子

はじめに

1927年2月17日の『岩手日報』に宮沢賢治への言及がある。「岩手文壇の情勢…
現在作家動静録…」(白雲居士)という記事で、小田島孤舟や金田一京助等と並べて、
かつて詩集『春と修羅』で『東京読売新聞』に取り上げられたこともある作家が、今
は花巻の「郊外の別荘に引き込み黙々として何かお仕事を続けられてゐる」という
のである。たしかにこの頃の賢治は、農学校を退職後、花巻川口町下根子桜(現・花
巻市桜町)の宮沢家の別荘で独居自炊しながら「羅須地人協会」という農村青年に向
けた私塾を開いていた。ここで注目したいのは、賢治の住まいを記事で「郊外の別荘」
と表現された点である。ここでの「郊外」には「町外れ」という場所を指すに留まら
ず、同時代におけるどこかしらモダンな意味合いが漂っている。

この記事から数年後、滞京中の1931年9月、賢治は「雨ニモマケズ」を書き付け
た手帳の二頁目に、「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒノマタ北上峽野ノ松林ニ朽チ
ノ埋レンコトヲオモヒシモノ父母ニ共ニ許さずノ廢軀ニ薬ヲ仰ギノ熱悩ニアヘギテノ
唯是父母ノ意ノ僅ニ充タンヲ翼フ」という遺言を思わせるような一文を書き記してい
る。故郷の山野に身を埋めたい、という思いよりも先に、東京の「郊外」で一生を終
えたい、という願いが書かれているのに目が止まる。「昭和六年九月廿日ノ再ビノ東
京ニテノ発熱」という大きく濃く記された言葉の周囲に薄く小さく書き込まれたこれ
らの文言から、花巻の「郊外の別荘」体験と、未経験の東京「郊外」生活への憧憬、
そのせめぎ合いが感じられるのである。

一方、そうした現実の「郊外」とは別に、賢治の作中にも「郊外」と思われる場所
がたびたび登場する。続橋達雄は、「〈町はづれの川ばたにあるこはれた水車小屋〉に
ひとり住むゴーシュ、〈ある裏町の小さな家に住む〉ジョバンニの一家、町ではなく
て〈大きな森のなかに生れ〉育ったブドリたち」と言うように、童話の舞台が、少な
からず郊外的な空間に設定されていることに気づいていた⁽¹⁾。本稿はその視点を引き
継ぎつつ、作品における郊外に同時代的な郊外の様相を重ね、賢治の〈郊外〉を読み
解く試みである。

1. 「郊外」の変遷

「郊外」とは、そもそもどのような場所なのだろう。賢治と「郊外」の関係性を考
えるために、まずは語の意味の変遷と同時代的意味をおさえておきたい。

もともと、「町外れの野」、「市外」といった意味で、平安時代から使用されていた
この語は「都会民が隠居したり、逍遙したり、遊山したりする町外れの野」の意味を
担っていた。都市を圍繞する周縁地帯が「郊外」であり、「郊外」の向こうには、農
村が点在し、更にその先に自然の山野が広がっている⁽²⁾。都市部が広がれば、必然的
に「郊外」はより外縁へと押しやられ、その先にある野原や森林も侵食されていくこ

ととなる。まずは、「郊外」とは、意味が塗り替えられつつ、一方向へと変動を続けることを運命づけられた空間と捉えてよいだろう。

ところで現在の「郊外」と言えば、国道沿いの大型店舗や、ニュータウンが立ち並ぶ均質空間（三浦展いうところの「ファスト風土」）が念頭に浮かぶ。従来の都市周辺の緑地帯から、そうした現代的郊外へと「郊外」の持つ意味は大きく転換した。その過渡期にあたるのが賢治が執筆に勤しんだ大正から昭和初期である。ここではまず、「郊外」の場所をクローズ・アップした国木田独歩の『武蔵野』（1901）に触れておきたい³⁾。

武蔵野を散策しながら目に映る自然の風景を次々に描写してきた独歩は、終章でそれらを振り返り、「郊外の隣地田圃に突入する処の、市街ともつかず宿駅ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場処を描写することが、頗る自分の詩興を呼び起すのも妙ではないか」と自問する。そして、「町外れの光景」に惹かれる理由を、「何となく人をして社会というものゝ縮図でも見るやうな思をなさしむる」点、換言すれば「田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語、小さな物語、しかも哀れの深い物語、或は抱腹するような物語が二つ三つ其処らの軒先に隠れていさうに思はれる」ところに求めている。「都会」と「田舎」の混じり合う場所には人知れぬ「物語」がひそんでいる。そういう魅力を秘めた場所として「町外れ」を描き出したのである。

この〈発見〉が郊外趣味のブームを呼び、「自然の懷ろに起居して、悠々たる人生の幸福を享受」したい⁴⁾と願う人々によって、「町外れ」であった武蔵野が宅地化される端緒を開いたのは周知のとおりである。都市における騒音・煙害に加え、関東大震災（1923）で、都市にひしめく多くの木造家屋が倒壊したことが、郊外に住居を求める動きに拍車を掛けた。こうした時代背景のもと、江戸以来の風景が加速度的に失われてゆき、その過程で、『武蔵野』において同一視されていた「町外れ」と「郊外」の二語が、別個の空間を意味する言葉として分裂していったと考えられる。

このあたりの経緯を別の切り口から確認しておきたい。地理学者・小田内通敏は、名著の誉れ高い『帝都と近郊 都市及村落の研究』（1918、大倉研究所）において、「武蔵野台地」を中心とした緻密な「行脚的踏査」（フィールドワーク）を行い、都市に野菜を供給する近郊農家が現存する一方で、緑地帯が開発され、宅地化されている状態を詳細にレポートしている。そして、「郊外の意義に更に都市的居住地なる新味を加」えざるをえないと結論づけた。つまり1910年代から20年代にかけて、東京の郊外は、

①都市と農村の近接地・遊覧地（「町外れ」。以下「近郊」とする）

②都市民が憧れる「都市的居住地」（以下、「住宅地」とする）

といった異なる二つの意味を包含する場として存在していたということになる。やがて、徐々に「近郊」は後景に追いやられ、「住宅地」がその意味内容を発展させながら、現代の郊外像に接続していくこととなる。

しかし、社会状況の変化と、人々の抱く「郊外」のイメージとは別の話である。用

語の意味内容の変化が、そのまま同時代人たちにすんなりと受け入れられたわけではない。たとえば永井荷風の「郊外」(1935、『小説随筆集 おもかげ』収録、岩波書店)という小品では、「東京府下の六群が市に合併せられたのは、昭和七年の秋であつた。市外の郡村がむかしから呼び慣らされた其名称を失へば、郊外といふ言葉も亦おのづから意義をなさぬことになる。郊外といひ、近郊といったやうな言葉は今は死語となつた」とし、「ふらふらと散策に出がけたくなる」ような、「常に言ひがたい詩趣をおぼえさせ」られた「近郊」の消滅を嘆いている。「住宅地」は、荷風をはじめとする大多数の人々にとって、慣れ親しんできた「郊外」とは異なる場所という認識をされていたのである。「郊外」の語の捉え方に世代間格差が見られるのが、この時期の〈郊外〉の特徴である。

「町外れ」と「郊外」、その両方を作品に用いていた賢治は、そうした同時代の空気をどこまで把握していたのだろうか。ともあれ本稿では、「近郊」(「町外れ」)から「住宅地」へと意味が変容していく途上で、いまだ使い分けが明確になされず両者が混在した状態を、便宜的に〈郊外〉と呼ぶことにする。

2. 「町はづれ」と鉄道

賢治作品においては、「郊外」よりも「町はづれ」の語の使用例が多い。「町はづれ」は最初の文学的営為というべき短歌にすでに登場している。また童話でも、「馬の頭巾」(1921頃)などにその使用が見られる。中でも「銀河鉄道の夜 [第四次稿]」(1931頃)では「町はずれ」が重要な役割を担っている。少年ジョバンニが級友たちから逃れるように足を運んだ「町のはづれ」の野原が、「銀河ステーション」へと変貌し、ジョバンニが銀河に旅立つ出発点となるのである。この「町のはづれ」は、町と原野の隣接点であると同時に、日常空間と異空間の境界として設定されている。ジョバンニの旅は、空の野原を通過して「銀河のはづれ」から再び「町のはづれ」へと還る。とはいえ、そうした異界との接点として機能する「郊外」についてはさておき、本稿では、この二つの「はづれ」を繋いでいるのが「鉄道」であるところに注目したい。

そもそも鉄道の敷設と〈郊外〉の発展には密接な関連性がある。当初は休日に鉄道で都市から「近郊」に出掛けていた人々が、「住宅地」を求めて都市近郊に移り住み、鉄道で都市に出勤するようになってゆく。実際に「住宅地」から通勤していた田山花袋は、自らを「都会に向かう心と、野に向かう心」を抱く、「都会と野の接触点に住んでいる人間」と位置づけていた⁽⁵⁾。景観学を手がける樋口忠彦はこの記述を取り上げて、この「野に向かう心が、郊外住宅を生みだし、その郊外住宅が、西郊あるいは東郊の趣ある近郊を呑み込み、消滅させていくことになる」と捉える⁽⁶⁾。都会と野の接触点でありつつ、常に都会が野を侵食していく場所——それが、賢治の生きた時代の〈郊外〉の実態であった。

ここで、「都会」が「野」をスプロールしていく状態を賢治がどのように捉えていたのかを見ておきたい。童話「虔十公園林」(1923 頃)の次の箇所が象徴的である。

次の年その村に鉄道が通り度十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰れて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。その中に度十の林だけはどう云ふわけかそのまゝ残って居りました。

まず、鉄道が敷設され原野が切り開かれる。そこに工場が立ち並び、従業員たちが住むための家が建ち、やがて町ができてゆく。このわずかな数行の記述に、都市化の過程が凝縮されている。流れとしてはこの後、工場や鉄道、自動車等から排出される煤煙が町を汚し、苦しめられる都市住民の目は自然の残る場所、つまり〈郊外〉へと向けられる…、となりそうなところであるが、この作品では、無学な度十という男が植林した土地をアメリカ帰りの博士の提案で「公園」化するという展開をみせる。元は「林」であった場所が、「公園」という近代的な都市機能に変換されたわけである。当時の「公園」は、「日常生活の非自然的なものから逃れて、休養慰安を享けよう」⁽⁷⁾という目的から増設されるべきものとして推奨されており、造園学的に見れば、「公園」も〈郊外〉も、その果たすべき役割は同じであった⁽⁸⁾。こうした「公園」と〈郊外〉を同義空間として捉える、いわば〈造園学的視点〉は、やがて賢治を花巻市〈郊外〉の遊園地「花巻温泉」の設計（1929）に携わらせてゆくことともなる⁽⁹⁾。

ところでこの頃、岩手の地方都市のめざましい発展がメディアから日々発信されていた。たとえば『岩手日報』（1930、7、5）に、「昔街端れでも今は市街の中心」と題された記事がある。内容は「水沢町馬検場」が設置当初は「衛生上其他を考へ街端れの積りで現在の個所に設けられた」のに、次第に町が拡大したため現在は「市街の中心地」になっており、「衛生上にも又市街美の上から考へても現在の場所は不適當であるとて移転説が盛んにとなへられる」というものである。「街端れ」が「市街の中心」へと変貌を遂げたという事実が都市化の勢いを端的に示している。発展の途上にある都市にとって、場所もその呼び名も固定されたものではない。童話「二人の役人」（1923頃）にこの記事を彷彿とさせる箇所がある。

その頃の風穂の野はらは、ほんたうに立派でした。

青い萱や光る茨やけむりのやうな穂を出す草で一ぱい、それにあちこちには栗の木や、はんの木の小さな林もありました。

野原は今は練兵場や栗の畑や苗圃などになってそれでも騎兵の馬が光ったり、白いシャツの人が働いたり、汽車で通ってもなかなか奇麗ですけれども、前はまだまだ立派でした。

（中略）寺林といふのは今は練兵場の北のはじになってゐますが野原の中でいちばん綺麗な所でした。はんのきの林がぐるっと輪になってゐて中にはみぢかいやはらかな草がいちめん生えてまるで一つの公園地のやうでした。

かつて「ほんたうに立派」であった「野原」が、鉄道が敷かれ、「今は練兵場や栗の畑や苗圃などになり」、「野原の中でいちばん綺麗な所」（中心）さえも、「練兵場の北のはじ」（周縁）へと意味を変更されたことが語られる。ここでの賢治は、開発

後の風景を「なかなか奇麗」と評し、環境破壊といった観点では捉えていない。田野がスプロールされていく状況に対して賢治がさほど否定的でないのは〈造園学的視点〉を有していたためでもあるが、とりあえず「町はづれ」が、「はづれ」の意味を急速に変更されていく現場に賢治が立ち会っていた、ということに留意しておきたい。

3. 大都市の〈郊外〉／地方都市の〈郊外〉

賢治作品において、「郊外」の数少ない使用例の一つに、その名も「郊外」（1933）と題される詩がある。しかし、「野原は寒くあかるくて／水路もゆらぎ／穂のない粟の塔も消される」といった詩の内容からは、「郊外」と「野原」の同一性は認められても、そこに近代的な「住宅地」の意味は見あたらない。〈郊外〉を住環境として捉える同時代的視点を賢治は有していたのだろうか。その分析にとりかかる前に、先に通過しておかねばならない問題がある。それは、地方における〈郊外〉のあり方についてである。

1.で取り上げた『帝都と近郊』は言うまでもないが、当時の郊外文献を渉猟していると、基本的に「郊外」とは、東京・大阪といった大都会周辺の土地を指していることに気付く。たとえば造園家・西田富三郎の、都市の人々が「煤煙と紅塵と雑沓と喧争と不安とよりなるジャズの巷より逃れて、自然と文明、田園と都市との長所を結合せる郊外、水清く丘陵地の緑目映き郊外へと進出」することにより、「昨日の田園は今日の清新な郊外住宅地」へと変貌を遂げつつある、という指摘は示唆的である⁽¹⁰⁾。これは逆に言えば、都市が「煤煙と紅塵と雑沓と喧争と不安とよりなるジャズの巷」と化すことによって、「住宅地」としての郊外の必要性が浮上してくるということになるだろう。それならば「田園」と「都市」が渾然一体となっている地方都市においては、わざわざ「町はづれ」に「住宅地」を設ける必然性はないはずなのだが、『武蔵野』が導いた結果を思えば、ことはそう単純に片付けられない。

人々の〈郊外〉へのまなざしは、関東大震災の少し前から熱さを帯びていた。造園・建築関係の雑誌をはじめ、総合雑誌においても“郊外特集”が組まれているのは、そうした風潮をメディアが敏感に察知したことを示している⁽¹¹⁾。そして、〈郊外〉ブームを知るものにとって「町はづれ」は「住宅地」の要素を持った場所として映るのである。殊に地方においては、情報を入手した者にとってのみ、「町はづれ」や「田園」が、価値ある場所——すなわち「住宅地」の意味を帯びて把握されていた。このように、メディアを通して世界を捉え直す視線は、究めてブッキッシュなものだといえよう。「ブッキッシュ」とは、もともとは“本好き・書物に凝った”と同時に、“机上の、非実地的”といった意味内容を持つ言葉である。これを受けて本稿では、実態よりも書物を通して世界を把握しようとするありかたを〈ブッキッシュなまなざし〉と呼ぶ。ここで、そのまなざしで描かれた〈郊外〉文学と賢治の関わりについて触れておきたい。

1912年11月、賢治が父に宛てた書簡に「小田島孤舟著（三八年に大沢の講習会に来たりし佐々木孤舟といふ浄法寺の男）『郊外の丘』二十五銭」の記述がある。購買書リストの一冊なのだが、著者である小田島孤舟は「岩手歌壇の父」と呼ばれた歌人であると同時に、教育界や書道界にも名を馳せた人であり、賢治の父とも面識があっ

た。その第一歌集がこの『郊外の丘』（1912、曠原社）であり、東京での体験を交えながら地方郊外の風景を詠んだ歌はたとえば次のようである。

何となくうれしき思ひに耽りつつコンクリートに靴ぬぐひみぬ
草色のテーブルかけに午後の陽の光は匍へり鶯のなく
帰り来てホワイトシャツを脱ぐときに悲しきことをおもひいでつる
こころよく卓を囲みてペンをとる郊野をわたる風明き朝
汽笛などかすかに聞ゆる郊外の春の樹により目を閉ぢてみぬ

爽やかな野の風景に混ざって、「コンクリート」「テーブルかけ」「ホワイトシャツ」といったモダンな小道具が詠み込まれているのが印象に残る。若き日の賢治が手にした〈郊外〉文学が、地方都市・盛岡をモダンな空気で描き出していたことと、それが同県人の手によるものであったことは留意すべきであろう。そして、同県人の文学者といえ石川啄木の存在が浮上する。啄木の詩「家」（1911、『呼子と口笛』収録）では、憧れの住居が次のように描かれている。

場所は、鉄道に遠からぬ、／心おきなき故郷の村のはづれに選びてむ。／西洋風の木造のさっぱりとしたひと構へ、／高からずとも、さてはまた何の飾りのなくとても、／広き階段とバルコンと明るき書齋……／げにさなり、すわり心地のよき椅子も。

芳賀徹はこの詩を「西洋趣味的ハイカルチャーへの夢の物語」と読み、啄木が「洋書や洋雑誌のなかの挿絵」や、実際に目にした札幌の洋館等から「家」のイメージを膨らませたのではないかと推測している⁽¹²⁾。また松山巖は、この詩を「まるで郊外の建売住宅の宣伝コピーだ」と断じ、「この描かれた家には生計がまったく捨象されている」と指摘する⁽¹³⁾。「村のはづれ」を「家」を建てるべき場所に「選びてむ」とする啄木の夢の背景に「郊外生活」ブームがあったことは想像に難くない⁽¹⁴⁾。しかし、注目すべきは、在京の身でありながら、あえて東京ではなく「故郷の村のはづれ」にモダンな住居を構えることを想像している点である。孤舟や啄木が提示した、地方におけるモダンな「住宅地」のイメージは、そのブッキッシュな夢とともに、賢治をはじめとする地方都市の知識人たちに吸収されたのではないだろうか。賢治の長編童話「ポラーノの広場」（1927以降）はその継承の一つの形であると考えられる。

4、〈郊外〉文学として読む「ポラーノの広場」

「ポラーノの広場」は、大都市に住まう青年キューストが、地方都市での日々を回想する〈枠物語〉形式の童話である。導入部でキューストは「暗い巨きな石の建物」に身を置いて、「あのイーハトーヴォのすきとほった風、夏でもそこに冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波」と郷愁を込めて書きはじめる。思い出の中核をなすのは、モリーオ市と野原の中間地点に位置する〈郊外〉の生活である。ここでの「郊外」の語の使用を手がかりに、同時代

の文脈を重ねて「ポラーノの広場」を読んでみたい⁽¹⁵⁾。なお、舞台は「イーハトーヴオ」という賢治特有のファンタジー空間であるが、ここでは主人公が青年であり、大都市は「トキーオ」（東京を想起させる）、地方都市は「モリーオ」（盛岡を想起させる）というように現実とリンクした設定であるところを重視する。まずは、少し長い回想の冒頭部を見ておこう。

そのころわたくしは、モリーオ市の博物局に勤めて居りました。

十八等官でしたから役所のなかでも、ずうっと下の方でしたし俸給もほんのわづかでしたが、受持ちが標本の採集や整理で生れ付き、好きなことでしたから、わたくしは毎日ずみぶん愉快にはたきました。殊にそのころ、モリーオ市では競馬場を植物園に拵へ直すといふので、その景色のいゝまはりにアカシヤを植ゑ込んだ広い地面が、切符売場や信号所の建物のついたまゝ、わたくしどもの役所の方へまはって来たものですから、わたくしはすぐ宿直という名前で月賦で買った小さな蓄音器と二十枚ばかりのレコードをもってその番小屋にひとり住むことになりました。わたくしはその馬を置く場所に板で小さなしきみをつけて一疋の山羊を飼ひました。毎朝その乳をしぼってつめたいパンをひたしてたべ、それから黒い革のかばんへすこしの書類や雑誌を入れ、靴もきれいにみがき、並木のポプラの影法師を大股にわたって市の役所へ出て行くのでした。

好きな仕事を「毎日ずみぶん愉快に」こなしていたキューストだが、「殊にそのころ」、その「愉快さ」は増していた。理由は、「宿直」になったからである。「わたくしはすぐ宿直といふ名前で～番小屋にひとり住むことになりました」というように、その経緯はあっさり書かれているが、「宿直」が上から命じられたものではないことは、「すぐ」の語や、その後いそいそと準備して生活を楽しむ様子から推測できる。おそらくキューストは「宿直」になることを自ら申し出たのだ。そして、その「番小屋」は、「郊外のぎらぎら光る草の波」の中に建っていた。この立地こそ重要である。

モリーオでのキューストの職業は「官吏」である。「官吏」は当時「サラリーマン」にカテゴライズされ、「中産階級」と呼ばれるモダンな生活を志向する人々を指していた。キューストもその例にもれず、「雑誌」を携帯し、ファッションに気を配り、レコードを聴く趣味を持ち合わせるモダンな青年として設定されている。そして、このサラリーマンたちが憧憬の対象としていたのが、〈郊外〉の生活である。「郊外住宅地に於ける開発と分譲は、その多くが中産階級に向かって展開され」ており、その志向に合わせて洋風の生活が想定されていたのである⁽¹⁶⁾。

文化学院の創設者である西村伊作は、「平凡な土地に見へても、住み慣れるに従つて、面白い絵になる風景が発見され、詩になる生活を味ひ得ることの出来るやうになる、そんな土地を授か」ることがあれば、文化生活（モダンライフ）が実践できるので「幸福である」と述べる⁽¹⁷⁾。「俸給もほんのわづかな」下級官吏であるキューストには、自力で「新住家」を購入することは困難であろうが、彼はまさに「宿直」という形で期間限定の「土地を授かつた」のである。そして、その立地は「場所は、鉄道に遠からぬ、心おきなき故郷の村のはづれに選びてむ」と歌った啄木の「家」を彷彿

佛とさせる。鉄道にも近く、「市はづれの教会の塔」が見える場所だ。

もちろん、「番小屋」は「競馬場」の一隅にあり「郊外住宅」とは異なるわけだが、問題はその形状である。この場所は「まはりにアカシヤを植え込ん」であるため周囲の野原と一線を画している。「アカシヤ」の境界線は、「郊外住宅の外柵は須く自然の材料であり叢木の如く植込んだもの」であるのが理想とされていたことを彷彿とさせるし、さらに「そこらの畑では燕麦もライ麦ももう芽を出してゐました」とある「麦畑」は、〈郊外〉に欠かせないオプションであった⁽¹⁸⁾。つまり、実際は廃された競馬場に過ぎない場所であっても、〈郊外〉の知識を持つ者の目から見れば、いわばそこは庭付き一戸建て「郊外住宅」を想起させるものとなり得るのである。この見方には、語り手キューストが〈ブッキッシュなまなざし〉を有する人物であることが不可欠である。

キューストには農場で働く年少の友人たちがいる。キューストは彼らに同調しつつも、悪役として配された山猫博士・デスツパーゴにより同情的な様子を見せる。おそらくそれは、山猫博士がキューストと同様、モダンでブッキッシュな人物であるためだ。たとえば、資本家でもあるデスツパーゴの別宅は、玄関の「右側」に自室、「左側」に「応接室」という構造を持つ。これは典型的な「文化住宅」の間取りである。住居のあり方から、賢治がキューストとデスツパーゴの双方に、〈如何なる土地を選ぶべきか／如何なる家屋に住むべきか〉といった、中産階級の抱く憧憬を共有させようとしていたことがうかがわれる⁽¹⁹⁾。

ところで、「ポラーノの広場」にこのような住宅情報が盛り込まれている背景には、実際の盛岡市の事情があったと考えられる。建築史家の中川理は、『重税都市 もうひとつの郊外住宅史』（1990、住まいの図書館出版局）で、日露戦争後、家屋税等の増税の負担に耐えかねて都市の人々が郊外へと流出した歴史を扱っている。ここでいう〈郊外〉は、具体的には東京・大阪・京都といった大都市に付属する空間を指す。しかし、こうした現実は大都市に留まるものではなく、人口増加、住宅難、税負担から、人々が都市の外へと拡散してゆく傾向は地方都市でも同じであった。盛岡市においても、〈郊外〉が「市中からやむなく押し出された人々のまとまりのない、無秩序な住宅地」と化していく現実があったのである。

1921年6月17日の『岩手日報』には「市将来の発展は郊外に向かつて」という表題で、盛岡市長・北田親のインタビュー記事が掲載されている。そこでは大工場の建設等を視野に入れつつ、「当市今後の発展は漸次郊外に向ふことを予想し」ていることと共に、昨今問題となっている住宅難の打開案として、当時、東京市ですでに実施されていた「市営住宅」を盛岡市でも建設する計画が語られた。やがて、1922年3月、「市営住宅案」が可決、市の唯一の社会事業として計画が進められ、これを嚆矢として、北田は、在任中、四ヶ所百二十四戸の市営住宅建設を実施する。これらの「市営住宅」の建設地は、すべて、〈郊外〉が選定された。このように「郊外」を強調する北田の念頭には、この頃メディアでは盛んに喧伝され、東京や大阪に次々建設されていた「郊外住宅」の像が置かれていたことは間違いない。現に北田は建設された「市

営住宅」を「文化住宅」と呼び、その建設地にことごとく「文化小路」の名を与えていった。まさに〈ブッキッシュなまなざし〉の具現化である⁽²⁰⁾。もっとも、「郊外」と言えば大都市を囲繞するモダンな〈郊外住宅地〉と捉えるような、北田の抱くイメージが、果たして『岩手日報』の読者のみならず、記者にすらどれほど共有されていたかは疑問である。何しろ、当時の同紙にたびたび「郊外」の語が使用されているが、そのほとんどが昔ながらの「市外」「近郊」の意味を出ていないものであったのだから。

しかし、北田の文脈を正確に掴み、自身の生きる場所が〈郊外〉へと変容してゆく高揚感を覚えていた人々が確実にいたのである⁽²¹⁾。建築学者の内田青蔵が「同潤会の郊外住宅地開発」(鈴木博之他編著『シリーズ都市・建築・歴史7 近代とは何か』、2005、東京大学出版会)で指摘する通り、「郊外の生活を満喫するという生活スタイル」が確立されてゆくのはこの頃のことである。そしてそれは、「ある一定の収入を有し、かつ、郊外に特有の価値や意義を見出していた知的な都市中間層以上の人々に特有のものであった」のだ。実際、「市営住宅」の住民たちの階層を見ると、県庁職員、検事、郵便局員、騎兵隊員、専売局員、教師、銀行員、記者等々、官公吏も含む俸給生活者層、つまり、新中産階級者(『岩手日報』ではこれを「サラリーマンのあらゆる職業を網羅している」と記している)であった。キューストが、「官吏」として設定されたのには、この辺りの実情が投影されていると見ていいだろう。

ところで、住宅難打開策として構想された「市営住宅」であったが、東京の「田園都市」(田園調布)と同様、その対象者が前記のような「中産階級」であったため、実際に重税にあえぎ住宅難に苦しむ人々がこの恩恵を被ることはなかった。ブッキッシュな人々は、そのまなざしを共有しない人々を排除する側面を持つのである。また、彼らの多くは自らの浮薄な面を顧みず、メディアの動向に左右され、最先端の流行に無自覚に身を投じるような問題点を抱えている。ただし、その中において多くの知識人がそうであろうとしたように、賢治はおそらく自らのブッキッシュな面に自覚的であったし、また危機意識も強くもっていたと考えられる⁽²²⁾。作品のエピローグ部において、無自覚なブッキッシュ青年・キューストは「愉快」だった〈郊外〉生活を唐突に打ち切り、流転を重ねてゆく。賢治は、自らの分身とも言うべきキューストに、ブッキッシュであることの限界と可能性、その双方を背負わせようとしていたのではないだろうか。

5. 反転する〈郊外〉

〈郊外〉生活の後、しばらくしてキューストはモリーオを離れるが、賢治はその後のキューストの身の置き場に感づいたらしい。その模索の跡を改稿過程から辿ることができる。賢治はまず、エピローグに先立ち、思わせぶりに小出しにしていたファゼーロの姉である「うつくしい」ロザーロとキューストの間に発動されるロマンスの可能性をバツサリ削除する(結婚に触れる発言箇所を含んだ原稿四枚を廃棄)。その上で、産業組合の立ち上げから三年後、一旦はキューストをデステッパーゴの「文化住宅」

があったセnderド市（仙台を想起させる）に移動させようとして止め、次に「トキーオの市の町はづれで半日は働いて半日は本を読んだり書いたりしながら」といった、あたかもヘンリー・ソローの『森の生活』（1854）を彷彿とさせる、都市「近郊」の生活を送らせようとしている。同時代的に考えると、この半農生活はソローのそれより、横光利一の『春園』（1938）における、「東京へ着くと彼は急に武蔵野の中の人のまだ手を入れぬ雑木林が欲しくなつて毎日ぶらぶら郊外を歩いてみた。林の中を少し開いてそこへ小さな家を建て、野菜を自分の手で造り、静かに自分の勉強を試みたくなつたのである」といった記述と響き合う。

しかし賢治はこの「近郊」生活も削除し、最終的にはキューストを「友だちのいないにぎやかなながら荒さんだトキーオ」のただ中に置くことに落ち着いた。関東大震災以降の東京に、かつての「近郊」はスプロールされて存在を消しつつあった。代わってそこにあるのは、無制限に拡散を続ける「住宅地」である。しかも、その理想の住人として想定されていたのは、映画「マダムと女房」（1931）や先の『春園』の主人公たちのように、中産階級の「家族」であった。ファゼーロからもロザーロからも遠く離れ、〈独身〉としての設定を強化されたキューストの居場所はそこにはない。賢治は単身者という設定にふさわしい場所として、同潤会のアパートメントハウスを思わせる「暗い巨きな石の建物」にキューストの居を定めたのである。

このように書くと、キューストはブッキッシュであったがゆえに孤独な流転を課されたかのようである。「もはや書くことしか残されていない、最晩年の病床の賢治自身の転移」というような作者と重ねた読み方もあり得るだろう⁽²³⁾。しかし、キューストと対照をなす人物として、識字能力を持たない年少の友人・ファゼーロが配置されているところからは別の読みの可能性が垣間見える。ファゼーロは仲間とともに産業組合を立ち上げていく行動的な人物として描かれている。キューストの持たざる面を照射し、逆にファゼーロの足りない部分をキューストが補う、といった双方の協力で時代の打開策を提示するような構想だったのかもしれない。ただ残念ながら、より賢治に近い設定を持つキューストの側にウェイトが掛かりすぎてしまい、この構想は破綻している。ファゼーロの造形が、キューストのそれに比べるとリアリティに欠けているのも否めない。それでも、物語の結末における楽譜の描写にその構想の片鱗を見ることができる。

物語のエピローグで、「友だちのないにぎやかなながら荒さんだトキーオ」にいるキューストのもとに「一つの厚い紙へ刷ってみんなで手に持って歌えるようにした楽譜」が届く。楽譜は「はえある世界を／ともにつくらん」という力強い呼びかけで締められていた。ブッキッシュの境界を超えるのは、立場の違いを問わず「共有」できる「歌」である、という可能性が示唆されているかのようだ⁽²⁴⁾。もっとも、その要請に応じたキューストがしたことは、ともに歌うことではなく、「ポラーノの広場」という回想録を書くことであったことは、彼に課せられた設定の意味を示す、象徴的な展開といえよう。それは情報を享受する側から、〈郊外〉文学を発信する側への転身でもある。

ここで、「ポラーノの広場」における、もう一つの〈郊外〉に目を移してみたい。忘れてならないのは、題名にあるようにこの作品の重要な場所は「広場」であるということである。物語の前半には、「ひるには何もない野原のまんなかには不思議に楽しいポラーノの広場ができる」というユートピア伝説の探索、後半には、発見できなかった「広場」のかわりに、新たな「広場」を同じ場所（森のはづれ）に創設するという展開となる。これは、「町はづれ」（あるいは「森のはづれ」）の「野原」が、「広場」という「中心」となるべき場所へと、その機能を変更していく物語なのだ。「外れ」から人々の集う「広場」への転換。「広場」こそは、昔ながらの「近郊」でも、キューストが夢想したような「住宅地」でもない、新しい〈郊外〉の形であることが示される。この作品には、いわば可能性を秘めた空間として〈郊外〉が描かれていたのではないだろうか。先に述べたように、ここには現実の〈郊外〉の拡大が重ねられていると考えてよいだろう。

一方で、現実の〈郊外〉とは異なる、賢治の文学における〈郊外〉を形成する重要なファクターを改めて考えておきたい。賢治作品では不可思議な出来事が継起する場所として、「際」「へり」「はじ」「ふち」などさまざまな境界領域が頻出するが⁽²⁵⁾、先の「銀河鉄道の夜」で触れたように〈郊外〉もまたそうした機能を担った空間である。もっとも〈郊外〉を境界として捉える視点そのものは賢治独自のものではない。

〈郊外〉文学の先駆『武蔵野』ですでに独歩は、「海を描くに波打ち際を描くも同じ事」だとして、〈郊外〉を境界領域と捉えて、「波打ち際」になぞらえている。潮の干満に合わせてそのラインを移動させる「波打ち際」は、〈郊外〉にふさわしいメタファーである。ここで、「海」＝武蔵野、「波打ち際」＝「町外れ」、「陸」＝「東京（都市）」とする、独歩の比喩から浮かび上がってくるのは、あくまでも生活領域は町（都市）であり、そこから「外れ」た非日常的な空間が〈郊外〉である、というゆるぎない視線である。ところが、賢治が描く〈郊外〉を辿っていくと、その確定が揺らぎはじめるのだ。賢治作品における〈郊外〉は、そのまなざしのベクトルを転換させる装置としての機能を併せ持つからである。独歩が描いた〈郊外〉の地形図は、世界各国の地図が自国を中心に置くように、あくまで都市を中心に描かれたものだった。しかし同じ空間を別の文脈から表現するとき、それは全く違う様相を呈する。

坪井秀人は、『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』収録の童話「山男の四月」（1922）において、山男が里人に殴り殺されないために木こりに変身する場面を取りあげ、「山男にとって里人の方こそがまさに恐るべき異人であるわけで、こうした山から里を見る視点をとったところに宮沢賢治の新しさがある」と指摘する⁽²⁶⁾。「山から里を見る視点」に、賢治の独自性を見るこの指摘は、賢治の〈郊外〉を考える際、大変有効である。

そもそも〈郊外〉という呼び名は、都市>郊外>農村>山野といったように、ヒエラルキーを生み出す概念である。そこでは、都市を最上位に、人の住まわぬ山野を下位に置き、あたかも山野は都市の拡大とともに侵食自在な空間であるかのように扱われる。賢治文学の特異性は、そうした上位空間の位置を反転させ、まなざしの方向を

相対化してしまうところにもあるのではないだろうか。「町はづれ」にはじまる都市の隣接空間は、「森」や「野原」を視座とする時、「森はづれ」「山はづれ」として捉え直される。つまり、「はづれ」の位置が入れ替え可能なものとして提示されていることとなる。

たとえば、童話「貝の火」(1921 頃)では、うさぎのホモイの所に「向ふの向ふの青い野原のはづれから、狐が一生けん命走つて来て」、人家から盗んだ角パンを届ける場面がある。パンは「野原のはづれ」にある人家から調達されていた。「向ふ」は、賢治作品においては、その先に異界があることを示す際に頻出する表現である。野原を世界の中心とするホモイたちにとっては、人里こそが「はづれ」の先に広がる異界に外ならない。

「山男の四月」の山男では、山を下りた山男は、野原を渡って、次の七つ森の麓まで行き、町の入口で「大急ぎで形をすっかりなみの人に変へ」る。山男は、山→野原→町の順に移動する。こうした移動は他の作品でも見ることができる。「オツベルと象」(1926)では、仲間の象を助けに林(山)から飛び出した象たちは、「嵐のやうに林の中をなきぬけて」、「野原の方へとんで行」き、やがて「青くかすんだ野原のはて」にある「オツベルの邸の黄いろな屋根」を見つける(山→野原→人里)。また「グスーコブドリの伝記」(1932)では、主人公ブドリは、生まれた森を出て野原に向かい、そこでの生活を経て、汽車で都市へと移動していく。森→野原→都市というルートを取るわけである。

注目したいのは、森や山林と人里の間を媒介するのは、どの場合も「野原」であるという点である。「野原」で働く人々もいれば、ホモイたちのようにそこに息づく動物や植物も存在する。生活空間でもある「野原」は、「町」や「村」とその周縁空間とをつなぐ境界領域である。こうした意味において、野原は、〈郊外〉とほぼ同義であると言えよう。つまり、都市の住民の〈郊外〉に相当する空間が、森や山の民にとっては、「野原」に該当するのである。

町はずれの場所、流行の郊外住宅地、動植物の住まう野原。賢治は、時代の知識を享受しながらも多様な可能性を秘めた場として〈郊外〉を捉えている。作品に繰り返して描かれるのは、二つの空間の境界領域であり、不可思議な出来事が継起する場としての〈郊外〉であった。変動する空間として〈郊外〉を描こうとする姿勢は、「住宅地」の要素を含んだ「ポラーノの広場」においても、「野原」に開かれた「広場」の変容を通して貫かれていたのである。

おわりに

「雨ニモマケズ」が書かれた手帳を、いま一度、開いてみよう。最初の見開きページには「はじめに」で引用した通り、「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ／マタ北上峡野ノ松林ニ朽チ／埋レンコトをオモヒシモ」という、祈りのような言葉が小さな字で書き込まれている。

「大都郊外」は東京の郊外を意味しているのだろうし、「北上峡野ノ松林」は故郷

の山野を指しているのであろう。いずれかを終焉の地としたいという願いがそこに込められているわけだが、「マタ」という接続詞で並立させるにはいささかバランスが悪いようにも思える。しかし、「北上峽野」という「野原」もまた賢治の〈郊外〉であることを念頭に置くとその認識は変化する。両者はともに都市に隣接した空間であるが、その違いはまなざしの向かう先にある。一方は都市周辺に拡大を続ける「住宅地」として〈郊外〉を捉える視座であり、もう一方は迫り来る都市を自らの生活環境の「外れ」とする、自然の側からの捉え直しである。ここに〈郊外〉を捉えるまなざしのせめぎ合いを見ることができるだろう⁽²⁷⁾。

賢治の文学において、人為空間と自然環境は等価に扱われる。そのことを客観的に裏づけるために、実学でありながら「理想境の現出」（田村剛『造園概論』）を目論んだ造園学の知識が援用されていたのではないだろうか。ファンタジー空間と日常空間の混在は賢治文学の特徴であるが、その幻想を支えるのは存外に実学的な〈知〉である。〈郊外〉の描き方にも、同時代の〈知〉と切り結びながら花開いた賢治文学の特性が刻印されているのである。

(注)

(1) 続橋達雄『宮沢賢治少年小説』（1985、洋々社）

(2) 園田英弘『「みやこ」という宇宙 都会・郊外・田舎』（1994、NHK ブックス）

(3) 原題は「今の武蔵野」。初出は『国民之友』三巻（1898）。

(4) 中柄正一編著『郊外住宅と新別荘地』（1916、至誠堂）の「序」より。この書は、1916年1月から2月にかけて『國民新聞』紙上で行われた「理想的郊外生活地」募集の投票結果を纏め、解説を加えたものである。ちなみに1位には、武蔵野の一隅「府中町」が選出された。

(5) 田山花袋『東京の近郊 一日の行楽』（1916、博文館）。引用は、現代教養文庫版（1992、社会思想社）に拠る。

(6) 樋口忠彦『郊外の風景 江戸から東京へ』（2008、教育出版）

(7) 引用は、造園学者・田村剛の『造園概論』（1918、成美堂書店）より。なお、「虔十公園林」と「公園」については、「宮沢賢治と〈装景〉—『虔十公園林』を中心に」（森本、武庫川女子大学大学院雑誌『かほよとり』第4号、1996）で論じたことがある。

(8) 〈造園学的〉としたが、考えてみれば、『武蔵野』でも「余は東京府民に大なる公園を供せん」として郊外を「公園」に例えていること、また、この後、国立公園や森林公園が大流行してゆくことを思えば、「公園」と「郊外」を同一視する傾向は、時代が共有していたものだと言えるだろう。

(9) 花巻温泉と賢治の関わりについては、岡村民夫『イーハトーブ温泉学』（2008、みすず書房）に詳しい。

(10) 西田富三郎『新時代の住宅と庭園』（1924、太陽社書店）の「序」。

(11) たとえば、「庭園と郊外住宅」特集（『住宅』、1919.9）、「都市と田園」特集（『中央公論』夏季特別号、1921.7）、『郊外』創刊（郊外社、1923.12）、「東京郊外の研究」（『日本及日本人』、1926.1）、「郊外住宅」特集（『住宅』1933.10号）など。

(12) 芳賀徹「ハイカルチャーへの夢と西洋趣味 石川啄木の西洋幻想」(2000、川本三郎他編著『近代日本文化論3 ハイカルチャー』岩波書店)

(13) 松山巖『群衆—機械のなかの難民』(2009、中公文庫)

(14) 啄木と親交のあった幸徳秋水は「郊外生活」(『経済新聞』、1908.11.3)において、『「郊外より電車若くは汽車にて、市内のオツフキースに通勤するに非ずんば、以て文明のビジネスマンにあらず』とは、今のハイカラ青年の気焰なり、今や郊外生活は、東京に在りては、文明の趨勢と言はんよりも流行と名けんこと適切なるやもしれず」と、この頃の郊外ブームに言及している。

(15) 「ポラーノの広場」と「郊外」の関係性については「宮沢賢治「ポラーノの広場」論—或るモダン青年の手記」(2005、『阪神近代文学研究』第6号)及び「〈作家〉の誕生—「ポラーノの広場」にみる〈書齋〉の役割」(2008、宮沢賢治学会イーハトーブセンター編集委員会編『宮沢賢治—驚異の想像力 その源泉と多様性』朝文社8)においても論じている。前者では語り手がサラリーマンであるという点、後者では知識人としての側面を中心に挙げた。これまでの叙述と重複する箇所もありつつ、本稿はそれらの問題意識を継承しつつ発展させたものである。

(16) 庄司達也「郊外住宅と鉄道」(2008、和田博文監修『コレクション・モダン都市文化36巻』、ゆまに書房)参照。

(17) 西村伊作『現代人の新住家』(1919、文化生活研究会)より。ちなみに自力で入手した家と土地でない点は、羅須地人協会時代、実家の別宅で独居生活を送っていた賢治の体験とも重なるところである。

(18) 引用は、井上清「郊外生活の外柵」(『庭園』、1920、9月号)に「自然に憧れて郊外に出て尚自己を石や板で閉鎖せんとする人々は紅塵の都へ帰るべきである。郊外住宅の外柵は須く自然の材料であり叢林の如く植込んだものまであつて其何を善しとするかは邸宅の建築庭園の計画に依つて選択すべきもので、其設計者の意見に依つて定むべきであると思ふ」に拠る。また、「麦畑」と〈郊外〉の関連性は、川本三郎『郊外の文学誌』(2003、新潮社)での『のんちゃん雲に乗る』の解説部分に詳しい。

(19) 日本の鉄道沿線の住宅地開発の嚆矢となった「箕面有馬電気軌道株式会社(現・阪急電鉄株式会社)」の小林一三が、分譲地売出しのために作成したパンフレット『住宅地御案内』(1902)の謳い文句による。このスローガンは、渋沢栄一の「田園都市株式会社」による「田園調布」の開発(1918)へと引き継がれていく。

(20) 『岩手日報』(1924、4、19)によれば、盛岡市は「人口五万とすれば二万八千人以上の市民は税金を期限内に納むることができない」という状態に置かれていた。また、住宅事情については、吉田義昭・及川和哉編著『図説 盛岡四百年 下巻 [I]』(1991、郷土文化研究会)参照した。なお「市営住宅」に関しては、岡村民夫「イーハトーブ地理学」

(2011、『ユリイカ』、7月号)にすでに指摘がある。論者は、以前はキューストの郊外生活を疑似的なものに過ぎないと捉えていたのだが、「市営住宅」の存在を知ること、キューストの〈ブッキッシュなまなざし〉の背景に、賢治が直面していた盛岡市の実情があることを掴むことができた。

(21) 「ポラーノの広場」の冒頭で「美しい森で飾られたモリーオ市」と表現する宮沢賢治は、もちろんその一人である。ここに重ねられているのは、明らかに世界的に流行した「田

園都市」のイメージであろう。また、キューストが住んでいた競馬場のモデルとなった「黄金競馬場」は、『岩手日報』で、「移住者が激増した／盛岡市の郊外／上田小路つゞきの方面／黄金馬場附近には住宅が多い」（1924、5、22）と報じられる「新開地気分が漲」る場所だった。なお、この記事から一年後、実際にそこにはモダンな「文化住宅」（第三期市営住宅）が建てられた。

(22)「盛岡市郊外」を舞台とする戯曲「植物医師」（1924）では、インチキな療法を行う元県庁勤めの似非医師が風刺的に描かれ、ハイネの詩集を持ち歩き、「ロンドンタイムス」を購読していると嘯く狐は、そのスノップさが禍して土神に撲殺される悲惨な末路を遂げる（「土神と狐」1924頃）。また晩年の詩〔雪と飛白岩^{キャプロ}の峯の脚〕（1933）では脚本家でもある令嬢に対して、技師がその高慢さを激しく糾弾するくだりがある。しかし相手の様子を見て態度を翻し、「ぼくのいまがた云ったのは／ひるま雑誌で読んだんです」と、雑誌記事の受け売りであることを暴露してしまう。雑誌や新聞などメディアに敏感なものほど、そこから得た知識が判断の根拠となりやすい。技師の狼狽ぶりにはその危うさが託されている。

(23)磯貝英夫「ポラーノの広場」（1984、萬田務・伊藤眞一郎『作品論 宮沢賢治』、双文社出版）

(24)安藤恭子が「ポラーノの広場」（2003、『國文学解釈と教材の研究』増刊「宮沢賢治の全童話を読む」）で指摘したように、「すぐれた芸術と労働の共有による共同体—「広場」は、「友だちのないにぎやかなながら荒んだトキオ」で執筆活動をしている「わたくし」に、共有という新たな距離の可能性を示すものであるだろう。「歌」は、その「共有」の最も有効な手段として提示されているのである。

(25)宮沢賢治と境界に関しては、高橋世織「水際の身体」（1996、『現代詩手帖』、10月号）はじめ、すぐれた先行研究が多数あるのでここでは深く立ち入らない。

(26)坪井秀人「山とシネマと—〈故郷を失った文学〉とスクリーンの中の異界」（2006、『感覚の近代』、名古屋大学出版会）に拠る。人にとっては農具である鍬や鋤や山刀が「山と野原の武器」と表現されているのに注目し、賢治がさりげなく自然の側の視点を導入している点を指摘した、小森陽一の「狼森と策森、盗人森」論（1996、『最新 宮沢賢治講義』、朝日選書）も参照されたい。

(27)この書き付けの数頁先に書かれた「雨ニモマケズ」には、「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ／小サナ茅葺きの小屋ニ半」たいという「わたし」の願いが書き記されている。賢治の〈郊外〉は、晩年「北上峽野ノ松林」という地方の〈郊外〉へと、その重心を移していったことが窺われる。

※宮沢賢治テキスト（作品、メモ、書簡等）の引用はすべて『新校本 宮澤賢治全集』（1995～2009、筑摩書房）に拠る。

※本研究はJSPS 科研費 JP19K00350 の助成を受けたものである。